

「収穫の主に祈りなさい」

マタイ9:35～38

●導入

聖書の中に出て来る重要なキーワードというものがいくつかあると思います。キリスト教信仰を言いあらわす上で欠かせない重要な言葉、というものが確かにいくつもあるはずです。みなさんだったら、どんな言葉を思い浮かべるでしょうか。

贖罪 宣教

主イエスキリストが地上で成し遂げたことをキーワードであらわすとしたら、どんな言葉がふさわしいのでしょうか。私は2つの言葉が心に浮かんできます。それは「贖罪」と「宣教」です。

「贖罪」は聖書の中心的思想と言ってもよい言葉です。それは旧約聖書から新約聖書に至る聖書全体を貫く信仰の土台となるものです。人間の罪が贖われること。これこそ、神が私たち人類を救済するための偉大なわざであると言えることができるでしょう。

イエス・キリストが地上に来られた目的もこの贖罪を完成させるためでありました。キリストは罪人を救うために来られました。またキリストはご自身をいけにえとして、罪を取り除くために来られたお方なのです。

そして、この贖罪に加えて大切だと思うのが「宣教」であります。贖罪だけが目的だとしたら、キリストは直接十字架に向かっても良かったのかもしれませんが。公生涯が始まってすぐにゴルゴタの丘に立ったとしても贖罪の目的は果たされたことでしょう。

しかし、主イエスキリストは十字架と復活の前になすべきことがあったのです。3年半という時間をかけ、公生涯を通してなすべきことがあったのです。それが、今日取り上げていく「宣教」だったのです。

宣教はキリストのわざであったのと同時に教会のわざとなりました。宣教は弟子たちに受け継がれ、そして私たち教会のわざとなりました。主イエスが私たちに託された、この大切な働きについて、今日ごいっしょに聖書の言葉から学んで行きたいと思います。

●聖書朗読 マタイ9:35～38(新改訳2017)

9:35 それからイエスは、すべての町や村を巡って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、あらゆる病気、あらゆるわずらいを癒やされた。

9:36 また、群衆を見て深くあわれまれた。彼らが羊飼いのいない羊の群れのように、弱り果てて倒れていたからである。

9:37 そこでイエスは弟子たちに言われた。「収穫は多いが、働き手が少ない。

9:38 だから、収穫の主にも、ご自分の収穫のために働き手を送ってくださるように祈りなさい。」

●イエス・キリストの宣教

今お読みしました聖書箇所には宣教という言葉は出て来ません。そもそも聖書全体でも宣教というのは、たくさん使われてる言葉ではありません。新改訳聖書を調べて見ますと福音書で1回、使徒の働きで1回、そして新約の書簡で6回使われているのみです。

言葉としてたくさん出て来るわけではありませんが、それでもなお宣教は聖書において実に大切な行為として描かれているのであります。イエス・キリストが公生涯を始めるにあたって、まずバプテスマを受けられました。続けてキリストは荒野の誘惑、試みを受けられます。

バプテスマと荒野の誘惑は、いわばキリストの公生涯を始めるための準備のようなものでした。これらに続けてキリストは次のような言葉で、その公生涯を始められたのです。

マタイ 4:17

この時からイエスは宣教を開始し、「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」と言われた。

キリストの公生涯は宣教によって始まりました。宣教のための第一声は、悔い改めと天の御国の到来を告げる言葉であります。そしてキリストの公生涯は、最後までこの宣教によって全うされたのです。

J・フェルカクルという神学者は、この宣教という言葉を決定的に定義しています。

「宣教とは、ことばと行為をもって福音と神の律法を余す所なくすべての人に伝達することである」(J・フェルカクル)

イエス・キリストはまさしく、この宣教に生きたお方でありました。
キリストは、言葉と行いをもって福音と神の律法を伝え続けたのであります。

さて今日は最初にお読みしましたマタイ9章の聖書箇所から、この宣教について2つのことを申し上げ、一緒に考えてみたいと思います。

①主イエスは
宣教のために働かれる
②私たちは宣教のために祈る

①主イエスは宣教のために働かれる

②私たちは宣教のために祈る

① 主イエスは宣教のために働かれる

まず第一に主イエスキリストは、宣教のために働かれるお方です。主イエスが地上に来られた目的はまさに宣教のためでありました。主イエスの到来は私たちに福音をもたらしました。福音、良き知らせの到来であります。

そして、主イエスは、その福音を伝えるために働かれました。それと同時に主イエスの宣教のわざは福音を伝えること以外にもあったのだと聖書は言います。

9:35 それからイエスは、すべての町や村を巡って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、あらゆる病気、あらゆるわずらいを癒やされた。

ここに主の宣教のわざの全貌が記されています。ここで語られているとおり、キリストは巡り、教え、宣べ伝え、癒されました。このように宣教のわざには福音を宣べ伝えるだけにとどまらず、巡り、教え、癒すという働きも含まれていたのであります。

先ほどキリストは宣教をもって公生涯を始められたと申し上げました。悔い改めなさい、天の御国が近付いたから、と力強い言葉でキリストは宣教を始められました。同時にキリストがなされた事は、12弟子を選び、訓練することでありました。

確かにキリストは宣教のために働かれたお方です。大勢の人がキリストのもとにやってきて、福音の言葉を聞き、教えを受け、癒されたのです。でも、その働きは、キリスト一人だけで終わってしまうものではありませんでした。この宣教のわざは弟子たちに受け継がれ、ゆだねられ、託されていく働きでもあったのです。

マタイ 9 章の次の 10 章を開きますと 12 弟子たちがキリストに遣わされ出て行く様子が描かれています。いや、そればかりか、弟子たちはキリストの復活された後に全世界へと遣わされていくのであります。

聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けますとキリストは言われました。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となります、と言われました。

キリストご自身が宣教のために働くと同時にその働きは弟子たちに受け継がれました。さらにキリストがなされた事は、私たちキリスト教会が 2000 年に渡って受け継ぎ、行ってきた働きにも通じているのです。

2000 年に渡って教会は様々な国々や地域に出て行って、町々や村々を巡り歩くことをしてきました。出て行くことによって、出会いがあます。その地域の人々を知り、そこにあるニーズを知り、そしてそのためにできることを教会は見出してきました。

また、教える働きも教会の重要な働きとされてきました。学校を建て教育を施すこと、人々に聖書を配布し、聖書が教えていることを学ぶ機会を提供すること。教えることによって人々は聖書の真理を知り、神に立ち返る機会を得るのです。

そしてまた教会は癒しのわざを行ってきました。巡礼者をもてなし、病気やケガを治療することが教会の大切な働きとなっていた時代がありました。医療や福祉の働きもまた、教会が担ってきた大切な働きでもあります。

めぐみ教会もまた、主イエスの宣教のわざにならう教会であります。めぐみ教会はこれまでも様々な国々に人を送り出してきました。インドネシア、タイ、韓国、モンゴルなどを巡る旅がこれまで何度も行われてきました。

めぐみ教会では教会学校において、またマナ愛児園や森の学園において、教え、教育し育てる働きを担ってきました。この働きはますます重要かつ必要な働きとなっていくことでしょう。

さらにめぐみ教会は喜楽希楽サービスやからしだね、めぐみサービスといった働きを通して人々の必要に応え、人々の生活や健康を支える働きに貢献してきました。現代はますます人を癒す働きが求められている時代だと言えるでしょう。

主イエスキリストは宣教のために働かれました。そして私たちめぐみ教会も宣教のために働く群れであります。この時代にふさわしい必要とそれに応える働きをこれからも共に担っていきたいと思います。

②私たちは宣教のために祈る

今日2つめのポイントに進みます。「私たちは宣教のために祈る」のであります。

9:37 そこでイエスは弟子たちに言われた。「収穫は多いが、働き手が少ない。

9:38 だから、収穫の主にご自分の収穫のために働き手を送ってくださるように祈りなさい。」

収穫は多い、でも働き手が少ない、と主イエスは言われます。

これは一体どのようなことを意味する言葉なのでしょうか。

36節を見ると主イエスは群衆を見て深くあわれまれた、とあります。さらに、その群衆は羊飼いのいない群れのように弱り果て、倒れていると書かれています。主イエスの目に映るものは群衆の真の姿であり、本当の状態です。

人間の目には豊かで、力強く、何の問題もないように見えるかもしれませんが。人間の基準で計るのであれば、群衆は何の問題もないかのように見えるかもしれませんが。しかし主イエスが見るならば、彼らは霊的に弱り果て、道を探してさ迷い、立って歩く力もなく、倒れ込んだ状態にあるということです。

そんな彼らを見て、主イエスは「収穫は多い」と言われます。問題の中で、弱さの中で、力を失っている人々にあって、だからこそ収穫は多いのだと主は言われるのです。

そして、そこにこそ宣教の必要性があるのではないのでしょうか。

人間がどれだけ社会的成功を収め、物質的な豊かさを享受し、力や繁栄を手に見るように見えても、人々の霊的な必要は満たされることがありません。罪と咎によって苦しむ人々が救われることはありません。

主イエスがこの世界をご覧になる時、そこには真理を教える働きが不足しています。人々の癒されるべき状態が数多く見られます。そして何よりも福音の良き知らせを多くの人が必要としているのであります。

だからこそ「働き手」が少ないのだと主は言われるのです。人々の真の必要に応じていく宣教の働きを担う担い手が足りていません。主の収穫を刈り取るための働き手が求められているのです。

そこで必要とされていることは、私たちの祈りなのです。

「だから、収穫の主に、ご自分の収穫のために働き手を送ってくださるように祈りなさい。」

宣教の働きは多様であり、様々な役割が求められます。ある人は教える働きに召されていることでしょう。またある人は癒しの働きに召されている人もいるでしょう。またある人は福音を宣べ伝える働きのために召され、さらにはある人は出て行って遣わされるために召しを受けているのです。

私は中学生の時に将来、何をやろうかということ真剣に自分なりに考えていました。当時はまだパソコンさえも販売されていなかったのですが、何となくこれからはコンピューターの時代になるのではないかと漠然とした考えをもっていました。

そしてコンピューターを使う仕事を将来できたらよいと思い、またコンピューターを使って教会のために何かができるのではないかと勝手な想像をふくらましていたのです。そして、高校進学もそんな考えに沿った学校に入ることにしたのです。

ところが神様の計画はまったく違ったところにありました。高校生になった年の7月に私は朝岡茂先生の手によって、洗礼を授けてもらいました。そして、その勢いで夏の松原湖バイブルキャンプに参加したのです。

ところが高校生キャンプの講師の先生が、体調不良で突然、来られなくなったのです。でも私にとってはキャンプで楽しく過ごせれば良いとしか考えずに、気軽にキャンプに向かいました。そのキャンプの中で私は突然、神様の声を聞いたのです。

その時のキャンプは急遽、代理として立てられた先生がメッセージをしてくださっていました。ところが、そのメッセージがなぜか、私の心にぐいぐいと刺さってきたのです。キャンプの最終日の夜はローマ書のみことばが語られました。

「信じたことのない方を、どのようにして呼び求めるのでしょうか。聞いたことのない方を、どのようにして信じるのでしょうか。宣べ伝える人がいなければ、どのようにして聞くのでしょうか。」(ローマ 10:14)の言葉が私に迫ってきました。

そして講師の先生がこう呼びかけたのです。「将来、神様のために福音を伝える働きをしたいと思う人は手を挙げてください」まわりにいた何人も高校生が手をあげていました。その時、誰かが私の手を後からぐっと押したように感じました。そして、気がつくと私は手をあげていたのです。

それから 40 年近くが経ちますが、あの時、神様が私の心に語りかけ、私の手を動かしたとしか思えない出来事として、今でもその時のことを鮮明に覚えているのです。こうして私は、コンピューターではなく、聖書の言葉を使う働きへと召し出されました。

主イエスキリストが語られた「収穫は多い」という言葉は今でも、この世界の現実をあらわしているのではないのでしょうか。キリストが始められた宣教の働きは、教会に受け継がれ、いまなお続けられています。

教え、癒し、伝え、遣わされていく宣教の働きは、世界中で今もなお必要とされている働きです。もちろん、それはめぐみ教会にとっても同じです。めぐみ教会がキリストから託された働きの必要はますます、増し加わっています。まさに収穫は多いが、働き手が少ない。そんな状況が今も続いているのです。

めぐみ教会では教える働き、癒す働き、伝える働き、遣わされていく働きのために献身し、ささげておられる方がたくさんいらっしゃいます。そのささげられた働きが力となり、教会のわががこれまでも力強く進められてきました。

宣教の働きは、多様であり、ひとりひとりに求められる立場も役割も異なるのでしょう。しかし、すべての人に共通して求められることがあります。それが祈りなのです。「収穫の主に、働き手を送ってくださるよう祈りなさい。」

めぐみ教会に 4 つの事業がゆだねられています。次にこの働きを担っていく人は一体誰なののでしょうか？また、教会には牧会スタッフが立てられています。次に教会のスタッフとなって、宣教の働きを担うのは一体誰なののでしょうか。

いや、めぐみ教会だけにとどまらず、主の宣教は世界中に広がり、たくさんの収穫がすでに与えられています。私たちは今まさに収穫の季節を迎えています。この収穫のために働く人は一体誰なののでしょうか。

私たちすべてのキリスト者に求められているのは、祈りです。収穫の主は収穫のために働き手を送ってくださるよう祈ること。これが私たちに求められているわざなのです。

先週、朝岡満喜子先生、召天のお知らせがありました。土浦めぐみ教会の初代日本人牧師である朝岡茂先生と共に満喜子先生は神に仕え、教会に仕える献身者でありました。そして、満喜子先生の働きの中心にあったのはとりなしの祈りでした。

私は文字通り、このめぐみ教会で生まれ育った者の一人であります。私の成長の背後にはいつでも必ず朝岡先生ご夫妻のとりなしの祈りがありました。その祈りによって、受洗へと導かれ、またその祈りによって献身の志しを与えられたのです。

満喜子先生はめぐみ教会の牧師夫人として、また後に主任牧師として、私たち教会員を愛し、祈り、とりなしてくださいました。また、東京キリスト教学園女子寮主事となってからは大勢の献身者たちを支え、励まし、とりなして、送り出してくださいました。

さらに同盟教団の支援教師として、諸教会のため、それぞれの教会の教職者、信徒のためにささげられるとりなしの祈りは召される直前まで続けられていたのです。

満喜子先生は天に召されました。今度は、私たちが収穫の主は祈る者となる時ではないのでしょうか。満喜子先生がそうであったように、私たちは召されるその時まで、主に祈る者、とりなす者となることが期待されているのではないのでしょうか。

私たちは今日、本当にうれしい転入式、洗礼式を礼拝の中で持とうとしています。特に救われ、神の子どもとされ、洗礼を受けられたお二人を今日私たちは神の家族の仲間として迎え入れることができます。

救われる魂の背後には必ず祈りがあります。積み重ねられ、ささげられた祈りがあります。主は、その祈りの声に応じて、これからも多くの収穫を見せてくださると確信するのです。

私たち、土浦めぐみ教会はこれからも宣教する教会、宣教する群れであり続けたいと思います。そして、その背後になくてならないものは、収穫のための祈りなのです。働き手を求める私たちの祈りなのです。これからも主の収穫のために祈り続ける者でありたいと思います。

●祈り

神様、今日私たちは喜びの洗礼式、転入式を迎えることができます。私たち一人一人に人生の道のりがあり、その道の途中であなたと出会い、あなたに導かれる恵みを感謝いたします。

主イエスキリストは宣教の主でありました。町や村を巡り、会堂で教え、福音を宣べ伝え、そして人々を癒されました。その働きは私たち教会に受け継がれ、私たちはそのわざを担う者とされました。

そして主イエスは収穫のため、その働き手のために祈りなさいと言われました。これからもあなたのもたらしてくださる祝福の実に期待し、そのために働く者を起こして下さいますように。

私たちを教え、いやし、遣わし、用いてくださるお方
主イエス・キリストのお名前によってお祈りします。 アーメン

●祝祷

マタイ 9:35 それからイエスは、すべての町や村を巡って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、あらゆる病気、あらゆるわずらいを癒やされた。

私たちを教え、救ってくださる主イエス・キリストの恵み
私たちを癒し、おおってくださる父なる神の愛
私たちを遣わし、用いてくださる聖霊なる神の導きが
今、神を礼拝する一人一人の上に豊かに限りなくありますように。アーメン